



# 人権マガジン

2018年3月

## 2017年度「人権研修ツアー」報告（その2）

香川人権研究所では人権研修フィールドワーク事業「人権研修ツアー」を毎年実施しています。第12回人権研修ツアー（2017年9月7～8日）は「人権尊重のスキルを学ぶ」をテーマに、大阪鶴橋でヘイトスピーチや多文化共生をフィールドワークしました。その際のムンさん（多民族共生人権教育センター）の講演要旨を連載します。

## 民族の伝統と文化



チョゴリ屋は在日コリアンの民族文化を継承する店である。チョゴリはどんな時に着るか。6～7年前の大阪府立高校卒業式の写真をみると、一人の女生徒がチョゴリを着ている。鶴橋で仕立てたチョゴリである。彼女は高校時代からキムという民族名（本名）で通学していた。卒業式では卒業生300名ほどのうち4、5名の女生徒がチョゴリを着ていた。彼女以外のチョゴリを着ていた女生徒は全員、在学中は日本名を使っていた。日本語をしゃべり日本名を使うから在日コリアン

か日本人か見分けがつかなかったが、チョゴリ姿を見て初めて在日だと気づいた人もいた。

在日コリアンは10人中9人ぐらいが日常生活で日本名を使っている。「あなたはすっかり日本人になったね」「あなたは日本人と一緒にだね」と言う人がいる。私も「ムンさんは日本語もじょうず、日本人と一緒にじゃないですか」と言われることがあるが、失礼な言い方だと思う。日本で生まれ育ったから当たり前だ。こんなことを言われると違和感がある。日本語しか話さず、日本名を使っている、それと自分が心の奥底で「自分は〇〇人だ」ということは別の話である。袴をはいている女生徒も普段から袴をはいているわけではない。しかし、卒業式のような特別な機会に自分なりに選んだ袴を着ているのである。それと同じように、自分は朝鮮人だから、韓国人だから、それを象徴する服を着たいと思う民族意識が在日コリアンの中にもある。

駅前の商店のショーウィンドウに小さい服が飾られている。「百日祝い」（「百日ペギル」＝お食い初め）のときに子どもに着せる服（写真）である。在日コリアン家庭では、「ペギル」という朝鮮半島の行事が十数年前の調査では約4割の家庭で行われている。子どもが誕生から百日目を迎え、これからも元気に育ってほしいとの気持ちを込めてペギル

の服を買いに行く。私も子どもたちに着せてお祝いをした。私は韓国籍で妻は日本人なので朝鮮式と日本式のお祝いをした。チョゴリを着せた写真と和風着物を着せた写真を撮った。

鶴橋駅前市場や生野コリアンタウンは、在日コリアンにとって食材や儀式の道具などを買いそろえるために必要不可欠な場所である。同時に民族文化を継承する場所でもある。例えば「チェサ」と呼ばれる祖先崇拝の儀式がある。日本では「祖先崇拝」と言わず「先祖供養」と言う。日本は仏教だからご先祖様を供養するが、朝鮮は儒教なのでご先祖様は神様である。自分たちのご先祖様が神様になって我々を守ってくれるという考え方で崇拝の対象になる。チェサの儀式はそれぞれの家庭でやり方が違うが、今も在日コリアン世帯の9割が行っている。チェサで使う食器や屏風、お供えなどを売る店が生野コリアンタウンや駅前にある。餅米で作ったケーキやチェサやお正月のスープに入れる小判型のお餅などを売る店もある。今はスーパーでも簡単に買うことができるが、むかしはここへ買いに来た。他にもサメの肉を買いに来たりする。日本人はあまり食べないが済州島ではよく食べる。サメは朝鮮半島全土で日頃から好んで食べられており、チェサには欠かせないお供え物である。

## コリアンタウンの成立

大阪在住朝鮮人の職業（1923年）		
1	工員	7137人（60.3%）
2	商業	2207人（18.7%）
3	土木	1866人（15.7%）
4	無職	1031人（11.0%）
5	日雇人夫	453人（3.4%）

80年前、猪飼野がまだ「朝鮮市場」と呼ばれていた時代の写真を見ると、たくさん屋台が並び、ハンダで「クッパ」と書かれた看板も見える。クッパは韓国・朝鮮の雑炊のこと。戦後は他府県からもたくさんの方がここへ買い出しに来た。朝、家を出てここに着いたらお昼、その方たちが昼食で食べるご飯と汁ものを一緒に食べる屋台ができ、魚の稚魚を使った惣菜

を売る店等もあった。他にもナムルやスープ、モヤシを用いた料理なども売っていた。昔の朝鮮女性は常にチョゴリを着て、それに合わせて朝鮮の靴を履いていた。革や木で作った靴を買いにきていた。戦前から多くの朝鮮半島出身者がやってきて、朝鮮スタイルの文化と生活をするのに必要なものを売り買いする場所としてこのエリアが発展した。

では、なぜこのエリアに多くの朝鮮人が集まって住むようになったのか。理由の一つは大阪の街の特性にある。大阪は明治維新以降、東洋一の産業都市として発展した。その中心は大阪城周辺にあった大阪陸軍砲兵工廠（国営兵器工場）だった。その周りに大、中、小の工場がたくさんでき、大阪だけでは労働者が不足し他府県からもたくさん呼び寄せられて工場街が発展した。朝鮮半島からもやってきた。日本にきた朝鮮半島出身者の多くは地方の鉱山や土木作業に従事したが、大阪に限って言うと約6割が工場労働者だった（大阪市調査1932年）。とりわけゴム、ガラス、鉄など、当時日本人もなかなか就労しない「きつい」「汚い」「危険」の3K職場に朝鮮人労働者が集中していた。彼らが住んだ長屋界隈は江戸時代には田んぼや畑が広がっていたところだが、大阪が発展して人口が増えると新たな労働者住宅街として整備された。至る所に労働者向けの長屋ができ、地方から来た



### 大阪の労働者日給比較

(内務省「朝鮮人労働者に関する状況」1924年)

職業	朝鮮人	日本人
1 ガラス職工	1. 0円	1. 5円
2 鉄工	1. 5円	2. 0円
3 ゴム	1. 0円	1. 5円
4 メリヤス	1. 2円	1. 8円

労働者がそこに住み、働いた。日本人は金の都合がつけば住宅や長屋を自由に選択できた。しかし、朝鮮人に日本人の大家は家を貸

さなかった。入居差別だ。

2017年3月に法務省が外国人差別の実態調査を発表したが、直近の5年間だけでも日本で生活している外国人の4割が入居差別にあっている。当時大阪にきた朝鮮人はことごとく入居拒否にあったが、この界限だけは断られなかった。なぜなら当時この地域では水害が多く発生し、長屋の入居率は低く、空き家が多かったからだ。大阪市は川を埋め立てて運河をつくる工事を行った。下水も整備されず、水害のたびに排せつ物などがあふれて悪臭のひどい状態だったので日本人はこのエリアに住まなかった。大家たちは仕方なく入居者のハードルを下げ、朝鮮人も住ませた。当時、朝鮮人は家を探すのに苦労した。空き家や河川敷でバラック住まいしていた人が何百人もいた。だがここへ来れば家が借りられるので人数が増えていった。これがこの界限がコリアンタウンになった理由である。現在は運河が完成し、水害もなくなって居住状況が改善されている。

もう一つは仕事である。この界限は30~40年前までは町工場がたくさんあり、仕事もあった。中でもゴム工場はよく儲かっていたから多くの朝鮮人が雇用されていた。家を貸さないといけないから雇う、給料も安くすむ。戦前1924年に内務省社会局第1部(1942年に厚生省に改組)が全国調査したところ、全国各地で日本人労働者と朝鮮人労働者はかなり給料が異なっていた(表)。就職差別、職業差別が大阪の街に多くの朝鮮人を引き寄せた。生野区にコリアンタウンが成立した背景は差別だった。

## ヘイトスピーチへの反発



多くの朝鮮半島出身者がこの地に住み、昔から多民族共生が生活レベルで実践されてきた。だから、ヘイトスピーチがこの街を襲ったとき、真っ先に怒ったのはここに住む日本人たちだった。我々は生野区役所や大阪市役所に行政として何とかしてくれないかと要請に行った。だが相手にしてくれなかった。そこで生野区内の日本人の団体、商工会、PTA、社会福祉協議会などに「ひどいことが起きている、一緒に反対してください」とお願いに行った。するとどの団体も二つ

返事で快諾してくれ、大阪市や警察に抗議文を出すなど協力してくれた。その時ある老人が言った言葉が印象に残っている。生野区では日本人と在日コリアンがともに生きてきたことを自分の言葉で語ってくれた。老人にヘイトスピーチの文章やビデオを見せるとすごく怒った。「なんだこいつらは！わしは生野に70年住んできた。昔は韓国の人が次々とやってきて、日本のこともわからずたくさん喧嘩した。対立もした。それは昔のこと、その後はお互い理解して仲良くやってきた。今では商店街も韓国の人がいなかったら成り立っていかない。仲良くやっている。それなのに外からやってきた連中がヘイトだなんだといって、とんでもないことをやっているのは許されない。わしらはここで一緒に生きてきたんや。よっしゃわかった」と言ってくれた。この言葉が私は忘れられない。

異なる民族、文化、風習、習慣の人が一か所に集まると、最初是对立や喧嘩も起こる。しかし、この地域の人たちは「韓国人は出ていけ、朝鮮へ帰れ」と言わなかった。喧嘩をしながらも一緒にこの街で生きている。お互い努力しながら話をしながら一緒にやってきて、長い時間をかけて多民族共生を実践してきた。その人たちの強い思いや気持ちが、日本で初めてヘイトスピーチに対処する条例をつくる大阪市の動きにつながった。ヘイトスピーチ条例をつくろうとする自治体は全国にあるが、条例ができたのは大阪だけ。それは大阪に生野区があり、そこに住む日本人がちゃんと声を上げたからできたのである。

(続く)